

自ら学ぼうとする子を目指して

音楽ソフトを使った2年生の授業を通して

2年 音楽科「ドレミであそぼう」

杉浦 有子

1 はじめに

音楽を体で感じ、楽しんで歌ったり遊び歌に意欲的に取り組んだりする子供たちの姿は、実に生き生きとしている。範唱CDなどの美しい歌声を聴くと、夢中になってその良さを話したり、自分もそのように歌ってみたいと強く憧れる子供たちがだんだん現れ始めた。子供たちにとって身近な楽器である鍵盤ハーモニカの演奏でも同様に、楽しそうに吹いている。この子供たちが、自分の思いを自ら工夫して表現することで、音楽の楽しさは一層増すであろう。

実践は、特に鍵盤ハーモニカの演奏を取り上げて行うこととした。鍵盤ハーモニカの演奏では、技能の個人差が大きく、一本の指の動きにつられ他の指も一緒に動いてしまうような子は、教師を頼りにし、一人では練習を進めていくことができない。このような子も意欲をもって自ら練習しようとする段階にまで引き上げてやることはできないだろうか。また、学級全体への机間指導が十分に行えていないという授業の反省から、授業において正しい指使いや息の使い方を身につけ、子供たちが目標をもって練習するための指導の工夫が必要であると強く感じ、本実践に取り組むことにした。

2 研究の方法

<研究の仮説>

鍵盤ハーモニカの演奏の学習において、子供の興味を高める教材を利用したグループ学習を取り入れ、個々の演奏技能を見きわめ、その子の願いを大切にされた教師の支援をすることにより、子供たちは意欲をもって練習し、こう演奏したいという目標を持って自ら学習に取り組むことができるであろう。

<研究の手立て>

子供の意欲を高める教材の利用

- ・パソコンソフトの利用

グループ学習の場の設定

- ・教え合い励まし合える技能差を考えたグループ分け

教師支援の工夫

- ・個の演奏技能に応じたステップづくり
- ・進歩や努力を認め褒めること

学習カードの活用

- ・個々の目標の明確化
- ・成長の記録として、また教師との対話の場として

手立て について少し詳しく述べる。子供の意欲を高めるパソコンソフトとしてカワイの音楽ソフト『メトロっぴと音楽7つの城』を利用する。

このソフトは、パソコンの画面上で音楽に合わせて楽譜と演奏箇所を示す。ちょうど、教師が階名で歌いながら、音符（絵譜）を指差し楽譜を追っていくのと似ている。演奏された音は、絵譜上に緑色の点で表わされる。同時に、指使いのアニメーションも表示する。この利用により、児童は聴覚ばかりでなく視覚も十分に働かせ、学習への意欲を高めることができると考えた。



テストコースを選択すれば、一音ずつに対して、音程のずれはないか、音符の長さや拍のずれはどうかなどから、、、を、その音が出なかったときは×を表示し、演奏の採点も行う。録音再生機能を効果的に使い、個やグループの演奏をよく聴くことで課題や成果を見つけさせたい。

手立て 教師支援の工夫の「個の演奏技能に応じたステップづくり」は、曲をフレーズに区切ったもの（4小節）を1つの曲としてこのソフトの中で利用できるように、ソフト「スコアメーカー」を使って楽譜を作成した。

また、友達と学び合うことが大切であるという考えから、1人1台のパソコンを使用せず、パソコンソフトを利用したグループ学習を進めていく。

次の2名の児童を抽出児童とした。

児童A 音楽に対する関心は強いが、表現への工夫や自分の歌声、演奏の音色への関心を高めたい。目標をもって表現する経験をさせたい。

児童B 音楽に対して苦手意識がある。正しい音程で歌うことや演奏することができない。鍵盤ハーモニカでは、指が滑らかに動かず、大変受身な学習態度である。常に教師が言葉がけをしていないとぼんやりと過ごしてしまう。演奏技能を身につけさせ、意欲とともに自信を持たせたい。

3 研究の実際

児童のイメージを膨らませるために、授業の初めに、インターネット上の鳥図鑑から、カッコウの映像を見せ鳴き声を聞かせた。児童は、「うわー、きれいな鳴き声。本当にかっこうって言っている。」と嬉しそうな顔を見せ、喜んでカッコウの絵を描いた。森の中に聞こえるカッコウの鳴き声を想像しながら歌うようにすると、優しく話しかける気持ちで歌おうとしていた。

その後、鍵盤ハーモニカの演奏の学習に入った。1グループは、3～4名で、演奏能力がどのグループも均等になるように構成した。



初め順番に楽しそうに練習をしていた児童たちは、次第に不満を見せ始めた。このような児童の様子を見ていると、個々のやりたいことがかみ合わず、グループ学習がうまくいっていないと分かった。

児童 A も「今日の音楽の時間は、楽しくなかった。」と教師にこぼした。しかし、同時



に自分の音へのこだわりも見せ始めた。左の資料に「へたくそなソーミ ソーミがすごくうまくなってきた。」とあるように、満足のいくが演奏ができるまで、特に注意をはらってその部分を練習していたことは、授業の様子からもみてとれた。

弾んで吹く「かっこう」のところには、やが書かれ、同じ音の連続するところや息をたっぴり必要とする低音に や×がついている。息の弱い児童 A が、「いきをすうためにと中で口をはなしちゃうから、ぶつぶつきれないでふきたいよ。」と、自分の演奏をよく見つめ、息つぎに気をつけなければいけないことに自ら気付いた。そして、教師の演奏を聴きに来たり、タンギングの仕方を尋ねに来たりした。

再生機能を使って、じっと自分の演奏を聴くことができたことで、パソコンの画面上の音に対する評価と合わせて、自分の音符の長さが短いことに気づいた。「タンギングに気をつけて、すらすらふきたい。」と授業に臨むうち、自分の目指す演奏（フレーズごとのまとまりを大切にしたなめらかな演奏）がはっきりとし、そのために息づかい、息つぎに気をつけようと意欲をもつことができた。

学び合うグループ学習を目指して、次時はグループを再編成した。個々がどんな練習をしたいのか（小さなステップで練習 自分の音を確認しながら練習 グループの友達と合わせて練習）をもとに、まず3つに大きくグループ分けをした後、2つの観点「どのくらいの演奏技能を身に付けているか。」と、「児童相互のかかわりにより高め合えると期待できる組み合わせか。」から、再編成した。

児童は、同じグループの子供の良い所を聴き取る力もつけ、褒めたり励ましたり、アドバイスし合ったりした。そして、よいと感じたことは、自分にも取り入れようとしながら、学習を進めていった。

児童 B は、小さなステップを作ったことで、1フレーズ毎に取り組んでいこうと目標を持ち、指使いを大変意識して練習を進めた。友達のアドバイスをよく聞き、間違えそうになる指をしっかりと意識できた。また、友達の演奏に合わせて、自分も一緒に鍵盤の上で指を動かして確認したりもしていた。吹けるようになりたいと意欲を持ち少しずつ上達していく児童 B の姿は、これまでとは全く違う姿であった。

授業の練習の成果を確認する場面では、多くの児童が鍵盤ハーモニカの演奏を学級全体の場で聴いてもらおうと、意欲的に挙手をした。練習の中で上達したと感じられたからであろう。



その場面で、児童Aは授業記録にあるように、授業初めに、「2列目を間違えずにがんばりたい。」という児童Bの発言をちゃんと覚えていて、曲全体を演奏した中で、特にその部分に着目し聴くことができた。違うグループの児童の目標までも心に留めることができ、意識の高さが伺えた。

また、児童Aと同じグループの児童Dの発言から、児童Dは、目指す演奏を児童Aの演奏に見つけることができ、よりはっきりした演奏目標を描くことができたと言える。

この授業を振り返ってみると、児童Aは、第4時に目標としていた「途中で息の切れない演奏」を第5時にも続けて目指していたが、同じグループの2人の児童のそれぞれの良さを見つけて、友達から学びながら練習を進めていた。

いきをいっしょうけんめいすいながら、はじめてきれいにできたよ。

れんしゅうのとき、頭の中でかっこうってうたって、Dちゃんのひいているのを合わせてきいたら、本当にかっこうってきこえたよ。自分は、息を吸っても、吸うのが少しかから、音が小さいし、途中で息が吸いたくなって音が切れちゃう。けど、Cくんは、息をしっかりと吸って(2小節を)続けて吹いている。ことばがあいっているときにいきをすって、強くふいているところがいい。また、かんぺきじゃないから、みんなのを見てアドバイスしたいし、みんなのいいところをまねしたい。

この授業の終わりには、「先生、上手になったよ。」「うまくできたよ。」という声がたくさん聞こえてきた。きれいな手のかたちで初めて演奏をみんなに褒めてもらい「初めてねこの手で上手に吹けたよ。もっと上手になりたいな。みんな応援してね。」と嬉しそうに笑顔を見せた児童もいた。

4 おわりに

授業にパソコンソフトを利用したことで、これまで音楽に対する苦手意識があったり、鍵盤ハーモニカの演奏に関心を持たなかったりする子供たちも、練習への意欲をもつことができた。お互いの良さを認め合い、学び合うグループ学習を進める上でも大変有効であった。児童Bが、清掃中にも無意識に階名唱をし、楽しそうに指を動かしていた姿がとても嬉しかった。子供たちは自信を持ち、音楽の様々な要素によく耳を傾けながら、共に学ぼうとする態度をもつようになってきた。

第5時の授業記録

(略) 児童Bの演奏の発表後

T: よかったところを教えてあげて。

児童A: Bくんは、今日は2列目をがんばるってはじめに言っていたから、そこを聴いていたんだけど、前よりも上手になっていました。

(略) 児童Aの演奏の発表後

C: ソミ ソミ が、かっこうって聴こえてよかったです。

C: 全部上手にそろっていて、いいなと思いました。

児童D: 私のためには、はねないようになんですけど、Aちゃんは、はねていないので、私もそういうふうにかきたいです。

音楽を聴いて豊かに感じたことを、なかなか表現につなげられなかった児童Aは、左の授業日記の二重線のように、拍の流れに乗せて、のびのびと表現する児童Dの良さを感じ取り、自分の演奏に取り入れようと熱心に練習することができた。

また、指が滑らかに動かない児童Cには、テンポをゆっくりに変えながら、繰り返し指づかいを教えていたのだが、同時に、息つぎの上手な児童Cのよさを認め、息をたっぷり入れた音色の良さや、息つぎのタイミングをつかんでいた。